

席田大谷遺跡群5

－空港線関係埋蔵文化財発掘調査報告書3－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第828集

2004

福岡市教育委員会

席田大谷遺跡群5

－空港線関係埋蔵文化財発掘調査報告書3－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第828集



遺跡略号 OTN-6

遺跡調査番号 0216

2004

福岡市教育委員会



調査区北側全景と遠景（北から）

序

現在、福岡市はより活力のある住みやすいまちづくりの一環として、新たな交通体系の整備を進めています。本市の東を画する月隈丘陵も、福岡空港線・一般県道水城下白井線の開通に伴う開発が行われていますが、ここは弥生時代から人々が生活し、多くの遺跡が残されているところです。

本書は、福岡空港線道路改良工事に先立って行われた席田大谷遺跡群第6次調査を報告するものです。調査の結果、弥生時代から古墳時代に至る遺構、遺物が発見され、当時の生活を復元する上で多大な成果を挙げることができました。

最後になりましたが、発掘調査から整理、報告に至るまで、本市土木局道路建設部東部建設課をはじめとする関係者の方々及び地元の方々には多大なご理解とご協力をいただきました。ここに感謝の意を表するとともに、本書を文化財保護や普及、教育などに活用していただければ幸甚に存じます。

平成16年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 生田 征生

例　　言

1. 本書は福岡市博多区東平尾2丁目4番地内における都市計画道路福岡空港線道路改良工事に先立ち、福岡市教育委員会埋蔵文化財課が平成14年5月8日から7月13日にかけて発掘調査を実施した席田大谷遺跡群第6次調査の報告である。
2. 検出した遺構については、住居址はSC、掘立柱建物はSE、井戸はSK、土坑はSK、ピットはSPとし、掘立柱建物、ピット以外は一括して通し番号を付した。
3. 本書に掲載した遺構の実測は担当の井上繭子の他、桑原美津子、吹春憲治が、写真撮影、製図は井上が行った。
4. 本書に掲載した遺物の実測は谷が、製図、写真撮影は山口とし子、井上が行った。
5. 本書の執筆、編集は井上が行った。
6. 本調査の出土遺物、記録類は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵、管理されるので活用されたい。

遺跡調査番号	0216		遺跡略号	OTN-6	
調査地地番	福岡市博多区東平尾2丁目4番地内				
開発面積	m ²	対象面積	m ²	調査面積	355m ²
調査期間	2002年5月8日～7月13日		分布地図番号	雀居23-0024	

目 次

本文目次

I .はじめに	
1 . 調査に至る経過	1
2 . 調査体制	1
II .遺跡の立地と環境	
1 . 遺跡の立地	2
2 . 周辺の遺跡群	2
3 . 席田大谷遺跡群のこれまでの調査	2
III .調査の記録	
1 . 調査経過	7
2 . 遺構と遺物	7
①竪穴住居 S C 0 1	7
②掘立柱建物	7
③井戸	8
④土坑	11
⑤包含層	14
⑥その他の出土遺物	26
3 .まとめ	26

挿図目次

第1図 周辺の遺跡(1/25,000)	4
第2図 調査地点と周辺の遺跡(1/4,000)	5
第3図 調査地点の位置(1/500)	6
第4図 遺構平面図(1/100)	折り込み
第5図 S C 0 1 実測図(1/60)	8
第6図 掘立柱建物実測図1(1/60)	9
第7図 掘立柱建物実測図2(1/60)	10
第8図 S E 0 1 実測図(1/30)、出土遺物実測図(1/4)	11
第9図 S K 1 6・S K 6 0・S K 4 7 実測図(1/20)	12
第10図 土坑出土遺物実測図1(1/4)	13
第11図 S K 5 7 実測図(1/40)	14
第12図 土坑出土遺物実測図2(1/4)	15
第13図 包含層土器分布状況(1/40)	16
第14図 包含層出土遺物実測図1(1/4)	17
第15図 包含層出土遺物実測図2(1/4)	18
第16図 包含層出土遺物実測図3(1/4)	20
第17図 包含層出土遺物実測図4(1/4)	21
第18図 包含層出土遺物実測図5(1/4)	22

第19図	包含層出土遺物実測図6 (1/4,1/3)	24
第20図	ピット・その他出土遺物実測図 (1/4,1/3)	25

図版目次

- 図版 1 1 . 調査区北側全景 (北から) 2 . 調査区南側全景 (北から)
 図版 2 1 . 調査区北側全景と遠景 (北から) 2 . 調査区北側全景と遠景 (南から)
 3 . S C 0 1 (南から) 4 . S P 1 7 6 遺物出土状況 (西から)
 図版 3 1 . S E 0 1 完掘状況 (北から) 2 . S E 0 1 遺物出土状況 (西から)
 3 . S K 3 5 (東から)
 図版 4 1 . S K 1 6 遺物出土状況 (東から) 2 . S K 6 0 遺物出土状況 (東から)
 3 . S K 4 7 遺物出土状況 (北から)
 図版 5 1 . 調査区北側包含層土器溜 (西から) 2 . 調査区北側包含層土器溜 (北東から)
 3 . 調査区北側包含層土器溜 (南西から)
 図版 6 1 . 包含層飯蛸壺出土状況 (東から) 2 . S K 5 7 遺物出土状況 (南西から)
 3 . 調査区北側包含層完掘状況 (南西から)
 図版 7 出土遺物 1
 図版 8 出土遺物 2
 図版 9 出土遺物 3
 図版10 出土遺物 4
 図版11 出土遺物 5

I . はじめに

1 . 調査に至る経過

2000年2月7日に福岡市土木局道路建設部東部建設第2課（現東部建設課）より、都市計画道路福岡空港線道路改良工事に先立ち、福岡市博多区青木1丁目、東平尾1、2丁目地内における埋蔵文化財の有無について事前審査申請が提出された。申請地は各々席田青木遺跡群、久保園遺跡、席田大谷遺跡群の隣接地であることから、事業計画に基づきつつ埋蔵文化財課で敷地内における試掘調査を行った。その結果、数地点で遺構が確認されたが、このうち青木1丁目4番地内、東平尾2丁目2番地内においては2000年に各々席田青木遺跡群第4次調査、久保園遺跡第2次調査として発掘調査を行い、2002年に報告書を刊行した。また、青木1丁目1番地内においては、2001年に席田青木遺跡群第5次調査として発掘調査を行い、2003年に報告書を刊行している。

さらに、東平尾2丁目4番498-7地内において試掘調査を行ったところ、現地表下約130~150cmで黄灰色土が検出され、上面に遺構が認められた。この成果をもとに協議を行い、工事が行われる範囲内においてはやむを得ず発掘調査を行い、記録保存を図ることとした。また、土木局道路建設部道路建設第2課との間に発掘調査及び資料整理に関する協議を行った。発掘調査は2002年5月8日~2002年7月13日の間に行なった。

2 . 調査体制

調査委託 福岡市土木局道路建設部東部建設第2課（現東部建設課）

調査主体 福岡市教育委員会 教育長 生田征生

調査総括 埋蔵文化財課長 山崎純男

調査第2係長 田中壽夫

調査庶務 文化財整備課 御手洗清

事前審査 瀧本正志 大塚紀宣

調査担当 試掘調査 瀧本正志

発掘調査 井上蘭子

調査作業 石川洋子 泉本タミ子 伊藤美伸 乾俊夫 大賀規矩雄 桑原美津子 志堂寺堂

柴田博 田中トミ子 鍋山治子 濱地静子 林厚子 摺磨千恵子 平井武夫

吹春憲治 北条こず江 水野由美子 森本良樹

整理補助 谷直子（九州大学大学院）

整理作業 川田京子 佐々木涼子 馬場弓子 福島由衣子 山口とし子

このほか、発掘調査に至るまでの条件整備、調査中の調整等について福岡市土木局道路建設部東部建設第2課（現東部建設課）の皆様には多大なご理解とご協力をいただきました。ここに深く感謝いたします。

II . 遺跡の立地と環境

1 . 遺跡の立地

福岡平野は、東から南にかけて背振、三郡山塊に囲まれ、北は博多湾に面し、南北に延びる丘陵と沖積平野を交互に連ねて形成される。その沖積平野を、西から室見川、樋井川、那珂川、御笠川、宇美（多々良）川が貫流し、それぞれの河川により開析された丘陵や段丘によって画された小平野が形成される。ここでいう狭義の福岡平野とは、御笠川、那珂川流域の旧席田郡の一部、那珂郡、御笠郡に当たる部分で、この福岡平野を中心として周辺に重要な遺跡群が点在する。

席田大谷遺跡群が立地する月隈丘陵は福岡平野の東を画するように延びる。この丘陵は四王寺山から派生し、開析を多く受けた地形を呈し、舌状丘陵や独立丘陵が多く広がっている。これらの丘陵上には弥生時代を中心とする墓地や集落、古墳群が分布する。

席田大谷遺跡群は、この月隈丘陵の派生丘陵の中で、東平尾公園の展望台付近から西北西に延びる丘陵の分岐付近に位置する。

2 . 周辺の遺跡群

月隈丘陵上には先にも述べたように、席田遺跡群を中心とする多くの遺跡が分布している。ここでは席田遺跡群としてまとめられる、席田青木遺跡群、久保園遺跡、中尾遺跡、赤穂ノ浦遺跡、宝満尾遺跡を見てみよう。席田青木遺跡群は、弥生時代の甕棺墓群、弥生時代～古墳時代の集落、古墳時代の墳墓群、中世の集落や墳墓、近世墓などが検出されている。久保園遺跡は、弥生時代～古墳時代までの集落が検出されているが、特に第1次調査で確認された6間×5間の大型掘立柱建物や弥生時代中期後半～後期前半にかけての廃棄された土器溜が注目される。中尾遺跡は、弥生時代～古墳時代の竪穴住居址、掘立柱建物、溝等が検出された集落である。未製品の輝緑凝灰岩製石包丁が出土している。赤穂ノ浦遺跡は弥生時代～古墳時代の竪穴住居址、掘立柱建物、樋などが検出され、鹿の文様が施された横帯文銅鏡の鋳型が出土している。なお、赤穂ノ浦遺跡は現在席田大谷遺跡群の範囲内に包括されている。宝満尾遺跡では、甕棺墓、土壙墓が広がり、一基の土壙墓からは内行花文明光鏡が出土している。

古墳では、久保園遺跡の東側丘陵上を中心に、貝花尾古墳群、新立表古墳群、丸尾古墳群が分布する。貝花尾1号墳は、小竪穴形横口式石室を主体部とする径12mの円墳である。2号墳は、横穴式石室を主体部とする。新立表1号墳は主体部が横穴式石室の径10m以上の円墳である。丸尾1号墳は、主体部は竪穴系横口式石室である。2号墳は、径11～12mの円墳で横穴式石室を主体部とし、皮袋形瓶が出土している。このように近接した丘陵にいくつかの古墳が分布しているが、古墳時代の集落としては、丘陵裾部の中尾遺跡、赤穂ノ浦遺跡、久保園遺跡が挙げられ、古墳の被葬者との関連が問題となる。

このように月隈丘陵とその西側の平野部に分布する遺跡群は、それぞれが弥生時代以降運動して展開してきたと推定されている。

3 . 席田大谷遺跡群のこれまでの調査

席田大谷遺跡群の調査は、市立席田総合運動公園建設に先立つ記録保存のための発掘調査として始められた。昭和51年度は前年度に継続し、サイクリングロード、管理広場建設予定地、遊歩道が調査対象となり、新立表古墳、大谷遺跡、貝花尾2号墳が発掘調査された。これが席田大谷遺跡群第1

次調査である。第2・3次調査は、公園整備に平行して行われた、駐車場や道路の建設整備の一環としての道路の拡幅及び切り替え工事に先立つ発掘調査である。第4次調査は、ユニバーシアード福岡大会のための球技場建設工事に先立つ発掘調査、第5次調査も公園の整備事業に伴う発掘調査である。以下に各調査の概要を述べる。

第1次調査

弥生時代後期前半～後半にかけての竪穴住居址や溝が検出されている。2号住居址から小型鉄斧、青銅製鋤先が出土している。

「席田遺跡群調査概報Ⅱ 第2次発掘調査」福岡市埋蔵文化財調査報告書第46集 1978年

第2・3次調査

弥生時代中期～後期までの竪穴住居址が検出されている。また、谷に形成された包含層から多量の土器等が出土したが、中でも9点の鉄器が注目される。また、中国鏡と思われる鏡片が出土している。

「席田遺跡群 大谷遺跡2・3次 新立表古墳2・3号墳 高宮八幡宮所蔵鑄型の調査報告」1990年

第4次調査

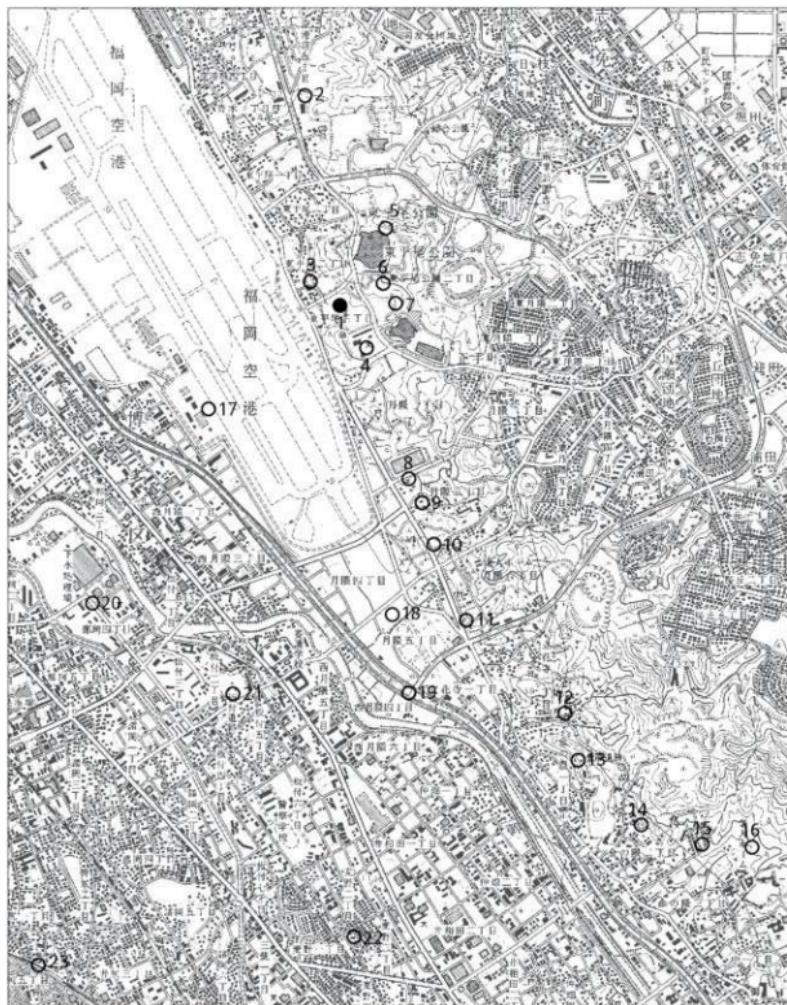
弥生時代中期の貯蔵穴、後期の物見台と思われる大型掘立柱建物、溝、中期末～後期初頭の甕棺墓、後期の石蓋土壙墓、古墳時代後期の竪穴系横口式石室古墳が検出されている。また、包含層から鉄器6点、石製銅戈鑄型模造品が出土している。

「席田遺跡群7-大谷遺跡第4次調査-」福岡市埋蔵文化財調査報告書第357集 1994年

第5次調査

弥生時代中期の甕棺墓が検出された。横穴式石室を主体部とする席田大谷古墳群第2号墳の調査も行われている。

「大谷遺跡群-席田大谷遺跡群5次調査-」福岡市埋蔵文化財調査報告書第537集 1997年

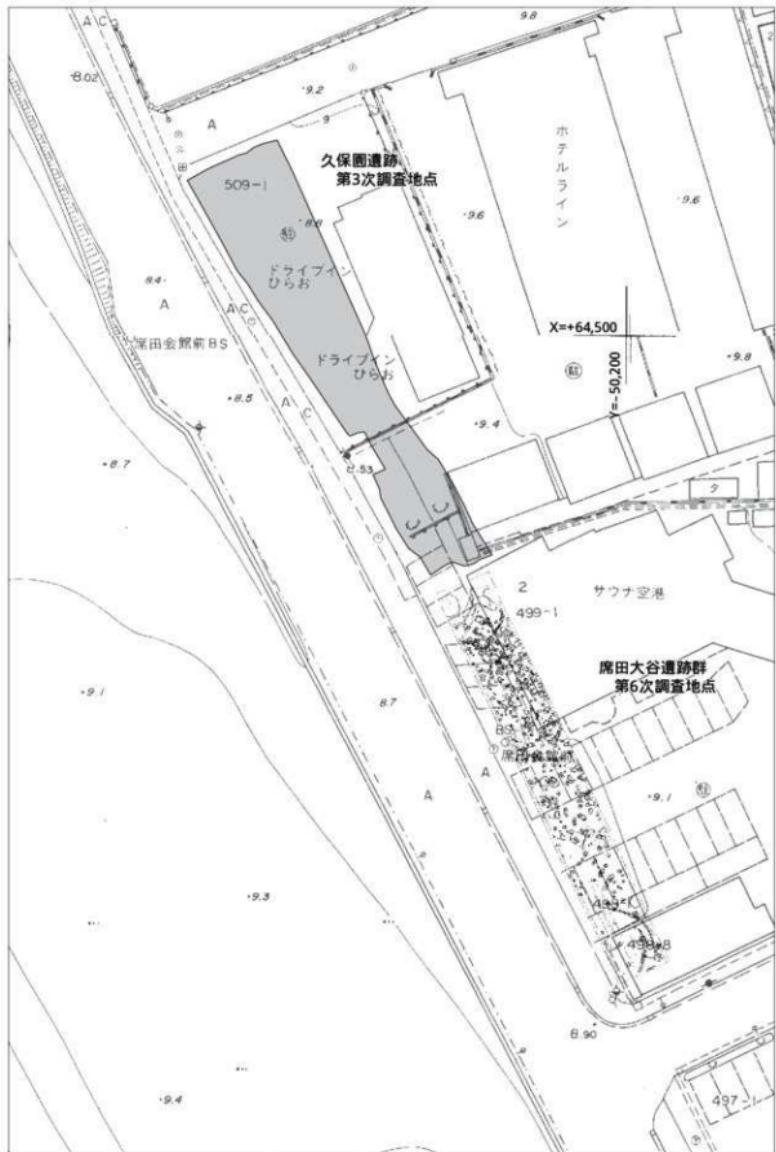


- | | | | |
|----------------|-----------|------------|-----------|
| 1 席田大谷遺跡群 | 7 丸尾古墳群 | 13 金隈遺跡 | 19 立花寺B遺跡 |
| 2 席田青木遺跡群 | 8 天神森遺跡 | 14 影ヶ浦遺跡群 | 20 那珂君休遺跡 |
| 3 久保園遺跡 | 9 下月隈B遺跡 | 15 堤ヶ浦古墳群 | 21 板付遺跡 |
| 4 宝満尾遺跡 | 10 上月隈遺跡 | 16 持田ヶ浦古墳群 | 22 麦野遺跡 |
| 5 貝花尾遺跡・貝花尾古墳群 | 11 上月隈B遺跡 | 17 雀居遺跡 | 23 井尻遺跡 |
| 6 席田大谷古墳群 | 12 立花寺遺跡 | 18 下月隈C遺跡 | |

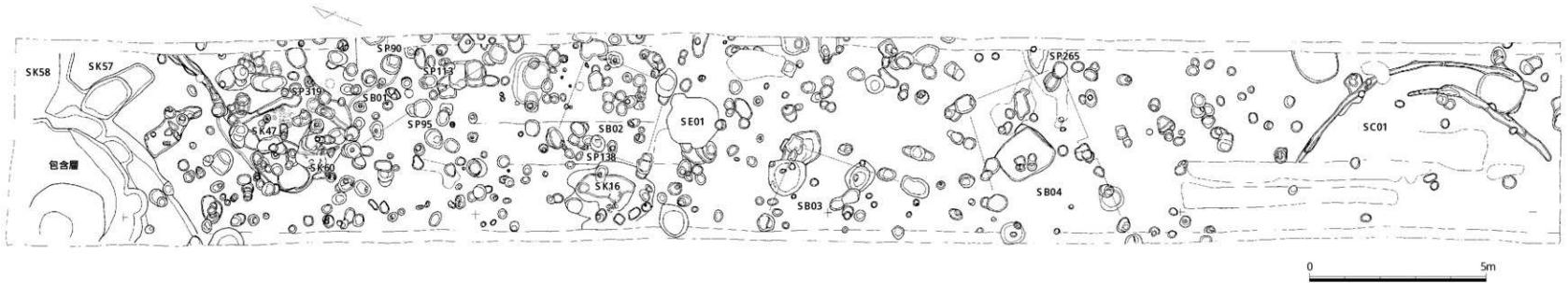
第1図 周辺の遺跡 (1/25,000)



第2図 調査地点と周辺の遺跡 (1/4,000)



第3図 調査地点の位置 (1/500)



第4図 遺構平面図(1/100)

III. 調査の記録

1. 調査経過

席田大谷遺跡群第6次調査地点は、調査区内に残土を置く余裕がなかったため、調査区の2/3は残土を別地点の同じ空港線道路建設予定地内に搬出し、残り1/3は反転して調査を行った。また、調査区の北側付近に敷地外から伸びている排水管が建物解体時に切断されてしまったため、大雨の際に丘陵から流れてくる排水が一気に調査区の中に流れ込むという事態に陥った。このため、調査区の壁が崩壊し危険な状況になったため、仮設の排水路をもうけ、一時的に排水を行う作業を行った。しかしながら、どうしても排水が漏れるために常に水中ポンプを回しながらの調査作業となった。

調査区は現地表下約1.5~2.0m、標高7.3~7.6mの黄褐色土（花崗岩バイラン土）上面で遺構が検出された。遺構面は南東から北西へ向かいゆるやかに傾斜して落ちてゆく。

調査区の北端で、この地山面は落ち、上面に黒褐色粘質土層が堆積していたため、トレーナーを入れて一部掘削を行った結果、遺物が多量に含まれ、かなり深くなりそうなことから、この包含層の掘削を中断し、先に他の遺構の検出・掘削を行うこととした。調査区北側の遺構検出・掘削・図面作成（1/20による遺構平面図作成、1/100による平板図作成、1/200による周辺測量）・写真撮影を終えた後、南側1/3の調査を行うべく反転した。同じように遺構検出・掘削・図面作成・写真撮影を行った。その後、最後に調査区北側の包含層掘削を行い、図面作成・写真撮影を行い、土器を取り上げた。7月13日には撤収を行い、すべての作業を終了した。

2. 遺構と遺物

① 竪穴住居址

明確に竪穴住居址と認識できるものが1軒検出されている。

S C O 1

調査区南端に位置する。平面は円形を呈し、推定直径約7mを測る。壁溝と柱穴のみで大幅に削平されている。遺物はほとんど出土していない。壁溝が2条と主柱穴らしき柱穴もいくつか見られるため、建て替え、もしくは短時間での切り合いが考えられる。

② 捩立柱建物

調査区に4基の擣立柱建物が検出された。いずれも出土遺物は細片で少量である。

S B O 1

調査区北寄りに位置し、東壁に切られる。N- 55° - Wの方位をとり、1間×2間以上の建物になる。

S B O 2

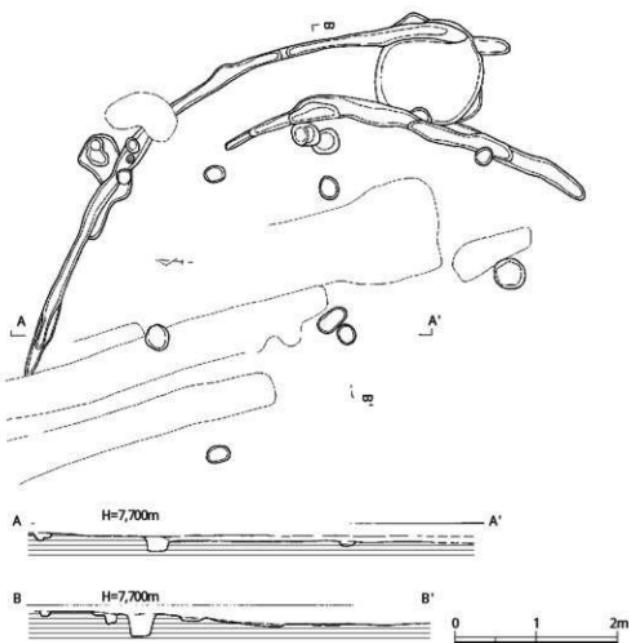
調査区中央やや北寄りに位置し、N- 85° - Eの方位をとる。1間×1間の建物である。

S B O 3

調査区中央やや南寄りに位置し、西壁に切られる。N- 3.4° - Wの方位をとり、1間×1間以上の建物になる。

S B O 4

調査区中央南寄りに位置し、西壁に切られる。N- 47° - Eの方位をとる。1間×2間以上の建物になる。



第5図 SC01実測図 (1/60)

③井戸

1基検出されている。

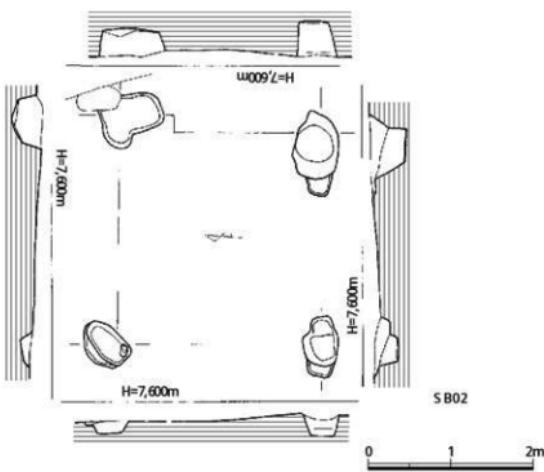
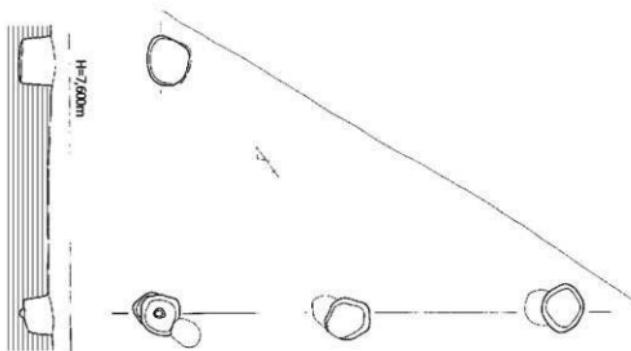
S E 0 1

調査区ほぼ中央に位置する。平面は円形を呈し、直径1.4~1.5m、深さ1.0mを測る。底面に2基ピットが見られる。

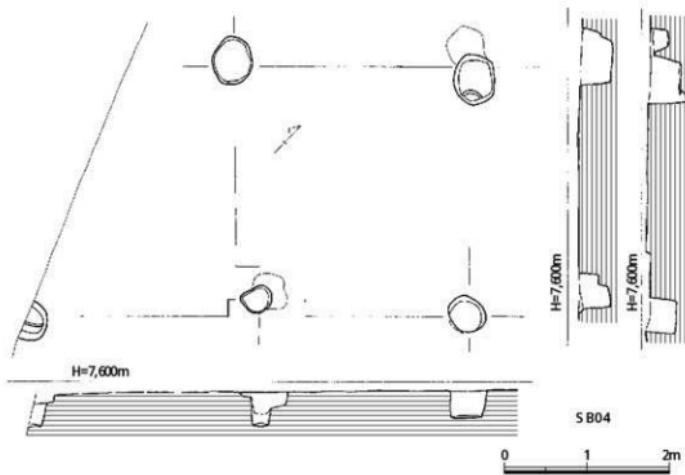
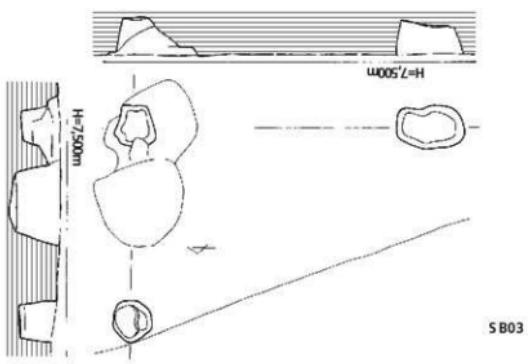
出土遺物

1は甕である。口縁部断面は逆L字状を呈し、口径28.2cmを測る。外面に縦方向のハケメ調整が施される。弥生時代中期中葉か。2は広口壺である。口径15.0cm、器高14.4cmを測る。口縁部はく字状に屈曲し、底部は丸底を呈する。外面にハケメ、内面はケズリで調整される。古墳時代初頭であろうか。3は広口壺の口縁部である。口径は13.8cmを測る。4は壺の底部である。5は大型甕の口縁部である。胴部から口縁部にかけてく字状に屈曲して立ち上がる。口縁部と胴部の境目に断面台形の突帯が1条めぐる。弥生時代終末と思われる。

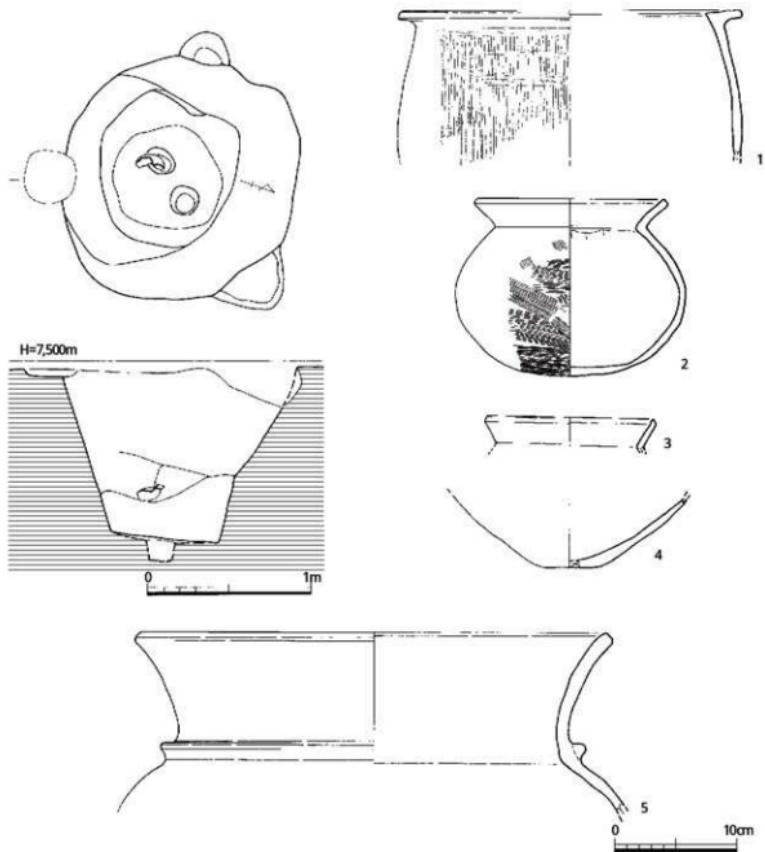
以上の出土遺物から、S E 0 1は弥生時代終末から古墳時代初頭の時期と思われる。



第6図 掘立柱建物実測図1 (1/60)



第7図 据立柱建物実測図2(1/60)



第8図 SE01実測図(1/30)、出土遺物実測図(1/4)

④土坑

S K 1 6

調査区中央北寄りに位置する。甕の破片が集中して検出された。

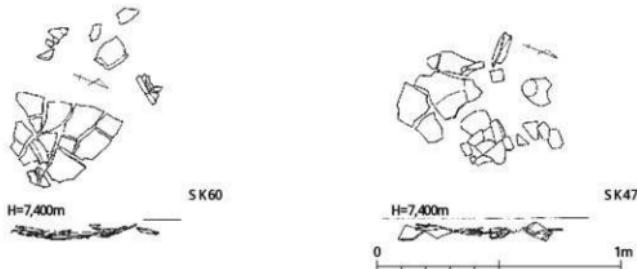
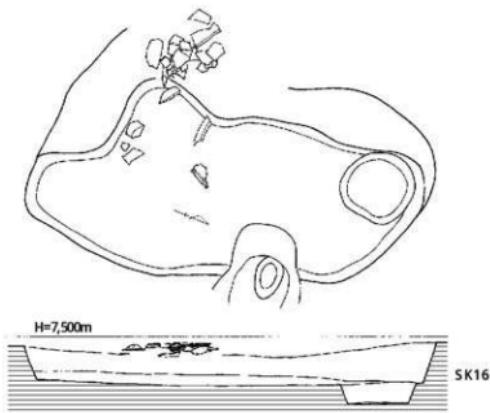
出土遺物

6、7は甕の破片である。6の口縁部断面形は鋸先状を呈する。口径30.4cmを測る。7の口縁部断面形は逆L字状を呈する。口径22.0cmを測る。弥生時代中期中葉～後葉か。

S K 6 0

調査区北側寄りに位置する。土坑の堀方は明確ではなく、土器がつぶれた状態で検出された。

出土遺物



第9図 SK16・SK60・SK47実測図 (1/20)

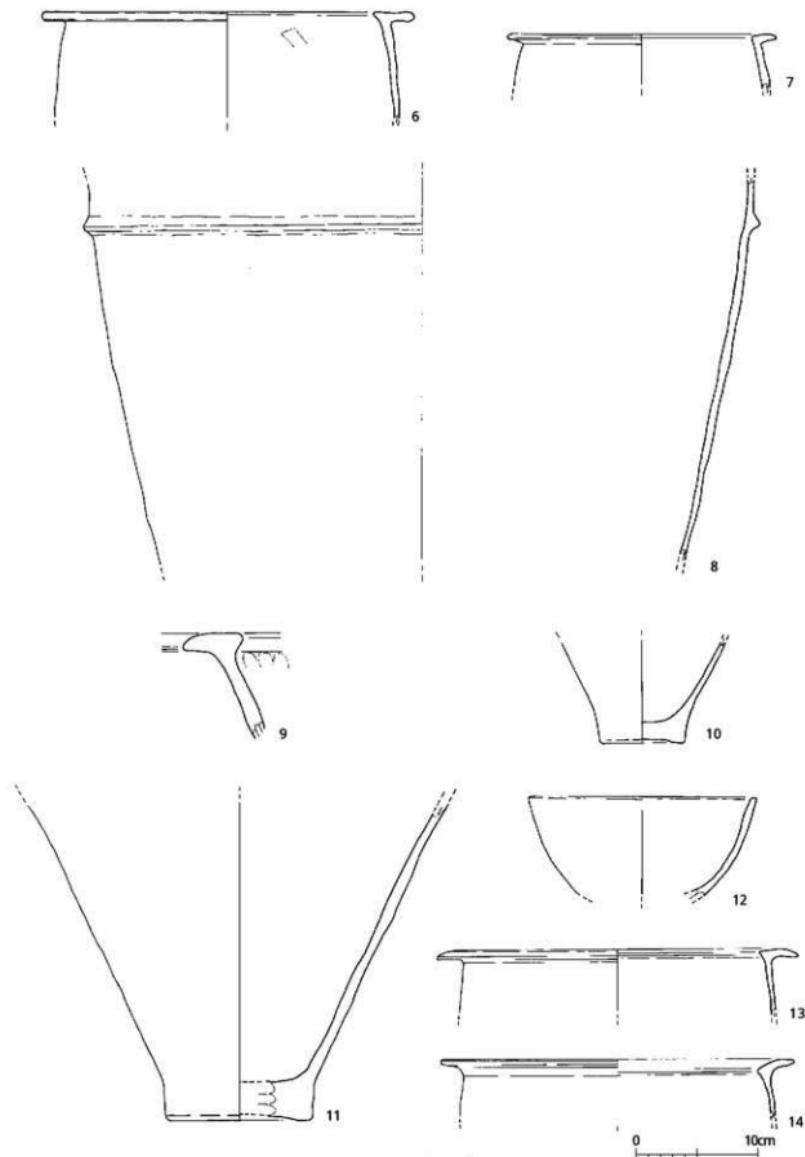
8は大型甕もしくは穀槽の胴部である。断面三角形の突帯が1条めぐる。突帯部分の胴部径は54.0cmを測る。胴部のみつぶれた状態で検出された。9は甕槽の口縁部である。断面形は鋤先状を呈する。弥生時代中期中葉から後葉にかけての時期か。

SK47

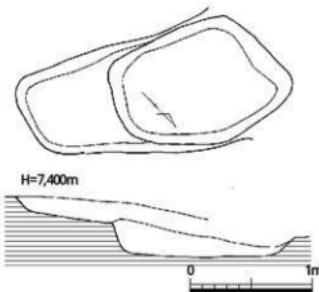
SK60の近くに位置する。同じように土器がつぶれている状態で検出された。

出土遺物

10、11は甕の底部。いずれも平底を呈し、10は底径7.0cm、11は12.0cmを測る。12は鉢である。口縁部から胴部にかけて緩く内湾し、口径18.7cmを測る。13、14は甕の口縁部。13は口縁部断面が鋤先状を呈し、口径29.4cmを測る。14はやや口縁部が立ち上がるく字状を呈し、口径28.8cmを測る。弥生時代中期中葉頃か。



第10図 土坑出土遺物実測図 1 (1/4)



第11図 SK 57実測図(1/40)

S K 5 7

調査区北端は地山が急激に落ち込み土器が多量に流れ込んでいる状況であった。その落ち込みの肩に長軸2.3m、短軸1.0mを測る平面橢円形の土坑が検出された。

出土遺物

15、16は甕の口縁部である。15は口径34.8cmを測り、口縁部断面は鉤先状を呈する。16は口径25.6cm、口縁部断面は逆L字状を呈する。これらは弥生時代中期中葉～後葉頃と思われる。17は甕の底部で、底径7.5cmを測り、上げ底を呈する。

S K 5 8

調査区北端の落ち込み東側に位置する。壁が崩れかけ危険であったため掘削を途中で断念した。

出土遺物

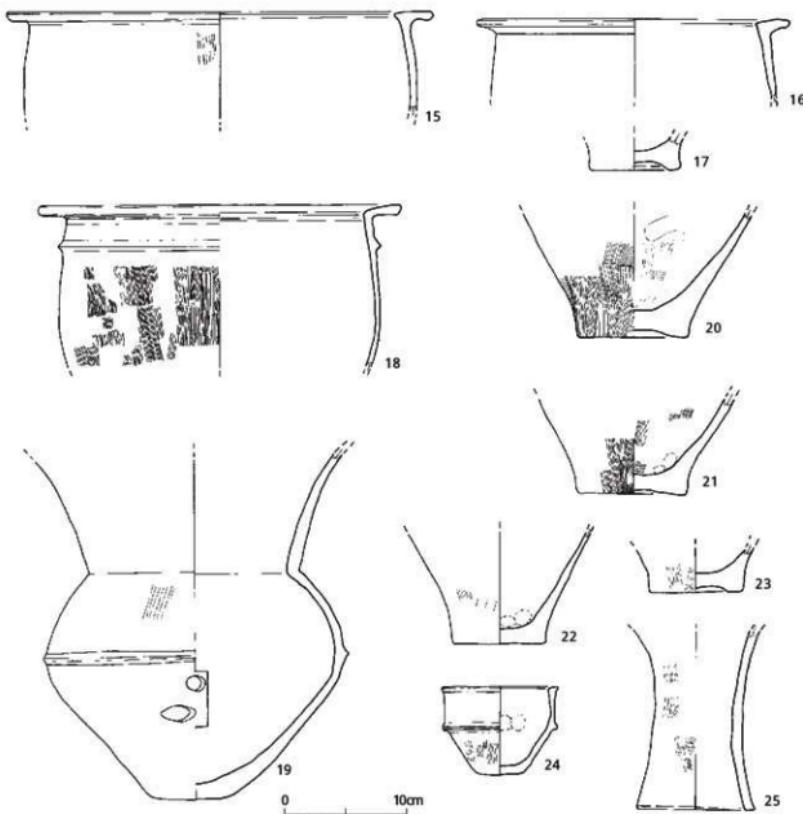
18は甕の口縁部である。口縁部断面は逆L字状を呈し、口縁部下に断面三角形の突帯が1条めぐる。外面にタテハケが施される。口径27.6cmを測る。弥生時代中期後半か。19は壺である。口縁部は欠損して不明であるが、頸部から胴部にかけてく字状に屈曲し、断面三角形の突帯が1条胴部にめぐる。また、突帯下に焼成後穿孔が2カ所見られる。弥生時代中期中葉であろう。20～23は甕の底部である。いずれも外面にタテハケが施される。21、23は上げ底、22は平底を呈する。底径は各々8.8cm、7.5cm、7.5cmを測る。24は小型の鉢。胴部に断面三角形の突帯が1条めぐり、口縁端はつまみ出される。外面にハケメが見られる。口径9.6cm、器高8.0cm、底径3.9cmを測る。25は器台である。バチ状を呈し、外面にハケメが施される。底径9.6cm、残高14.2cmを測る。

⑤包含層

遺構面である花崗岩バイラン土は調査区の北端で急激に落ち込んでいる。この落ち込みの反対側の立ち上がりは、本調査地点の北側に位置する久保園跡第3次調査区の南端で見られる。この落ち込み部分には上層から黒褐色粘質土、灰褐色粘質土の順で堆積しており、黒褐色粘質土層上部で土器が大量に投棄された状態で検出された。土器は落ち込みの肩部付近に分布している。

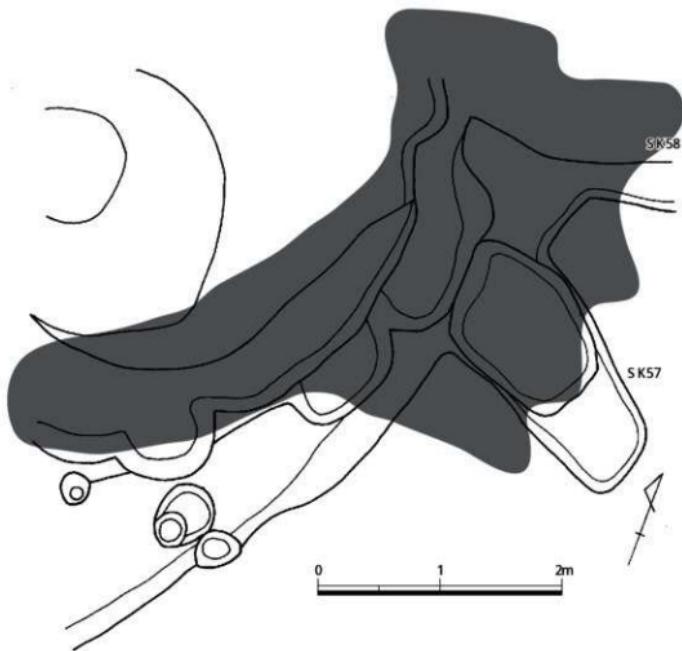
黒褐色粘質土層上部土器層から出土した遺物を述べる。

26～29は甕の口縁部である。26、28は口縁部断面が逆L字状を呈する。26は口縁部下に断面台形の突帯を1条めぐらせる。28は内外面にハケメが見られる。各々口径は32.4cm、31.9cmを測る。弥生



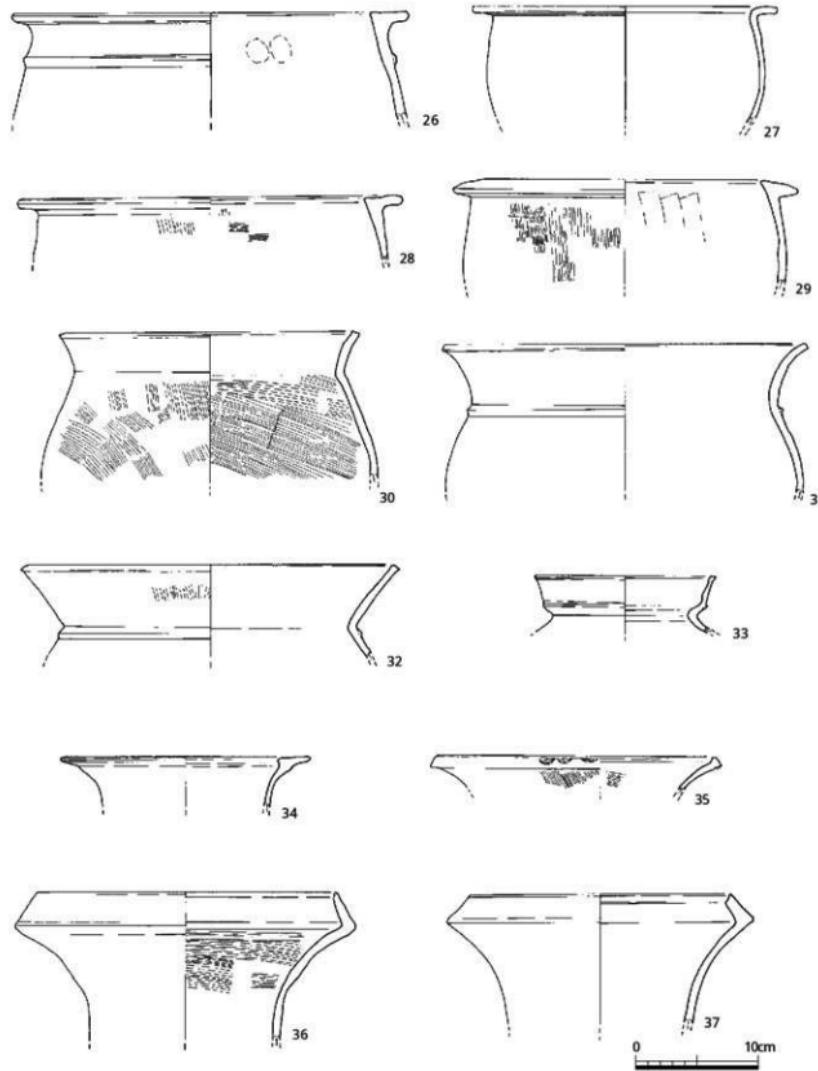
第12図 土坑出土遺物実測図2(1/4)

時代中期中葉であろう。27は口縁部断面が緩く逆L字状に屈曲し、胴部は緩やかに内湾する。口径25.0cmを測る。29は口縁部断面が鋸先状を呈し、端部が斜め下に下がる。内外面にハケメが見られる。口径28.2cmを測る。弥生時代中期中葉～後葉か。30～32は口縁部がく字状に屈曲する甕である。30は内外面にハケメが施され、口径29.6cmを測る。弥生時代後期後半頃であろう。31は口縁部と胴部の境目に断面三角形の突帯が1条めぐる。口径30.0cmを測る。弥生時代後期末頃である。32は30、31に比べて口縁部がより直線的に開く。頸部に断面三角形の突帯を1条めぐらせ、口径は30.8cmを測る。弥生時代後期末頃であろう。33は段をつけて屈曲した口縁部を持つ甕である。口径14.8cmを測る。山陰系である。

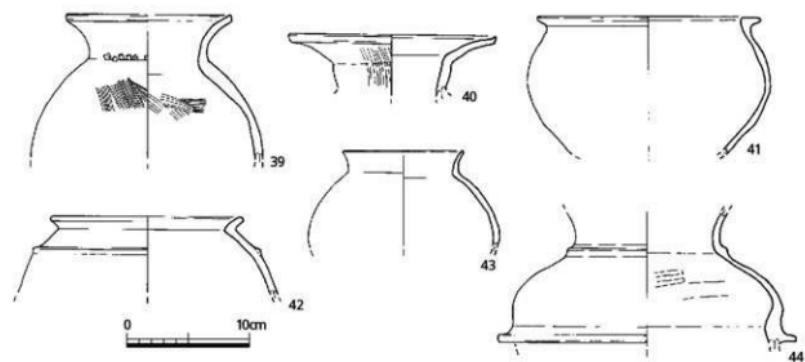
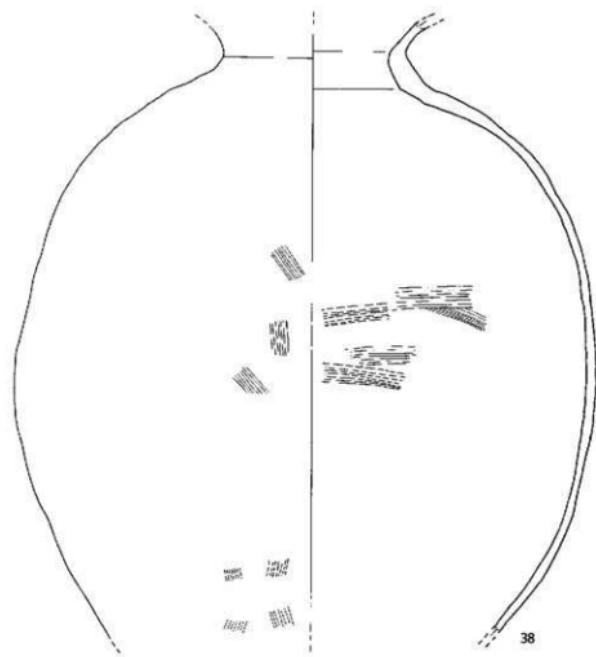


第13図 包含層土器分布状況 (1/40)

34~43は壺である。34は口縁部が鋸先状を呈し、頸部が長く外反する形状を呈する。口径20.3cmを測る。35は口縁部端が内側につまみ出され、頸部から外反して開く。口唇部に連弧文が刻まれ、内外面にハケメが施される。口径23.0cmを測る。いずれも弥生時代中期中葉頃であろう。36、37は口縁部がく字状に屈曲する複合口縁壺である。36は内面にハケメが見られる。口径は各々24.6cm、21.2cmを測る。いずれも弥生時代後期中葉頃であろう。38は大型の壺である。残高は51.0cm、胴部最大径は47.8cmを測る。内外面にハケメが施され、タタキ痕が残る。古墳時代初頭頃か。39は緩く外反した口縁部から胴部が大きく張る器形である。内外面にハケメが施される。口径13.4cmを測る。弥生時代後期前半頃か。40は口縁部が朝顔形に開く。口径17.0cmを測り、外面にタテハケが施される。弥生時代中期後半頃であろうか。41は口縁部断面が逆て字状に開く器形である。口径は16.6cm、胴部最大径は19.8cmを測る。弥生時代中期中葉～後葉の時期か。42は口縁部断面がく字状に屈曲し、胴部が大きく張る器形である。胴部上方に断面三角形の突帯が1条めぐる。口径15.8cmを測る。弥生時代後期前半頃であろうか。43は口縁部がほぼ直線的に立ち上がる器形である。口径9.8cm、胴部最大径15.6cmを測る。弥生時代後期末葉頃であろう。44はひさご形土器である。頸部に断面三角形の、胴部に断面長方形の突帯がめぐる。弥生時代中期後半頃であろう。



第14図 包含層出土遺物実測図1 (1/4)



第15図 包含層出土遺物実測図2 (1/4)

45~56は甕もしくは壺の底部である。45は若干上げ底になる平底で底部は厚みがある。底径9.1cmを測り、内外面にハケメが施される。46は平底を呈し、8.4cmを測る。47は上げ底で、底径8.0cmを測る。以上は甕の底部である。48~51は平底で、各々底径10.4cm、7.6cm、6.4cm、7.0cmを測る。50は胴部に穿孔が見られる。以上は壺の底部と思われる。52~54は丸底に近い平底を呈している。底径は各々5.7cm、6.6cm、7.1cmを測る。52は内面に、53は外面にハケメが施される。54は丸底を呈し、内外面にハケメが施される。56はレンズ状の底部を呈している。底径4.4cmを測り、内外面にハケメが施される。

57は筒形器台の口縁部である。口径は9.8cmを測る。外面に丹塗りが施されている。58は支脚の底部である。底径は8.6cmを測る。59~63は高坏である。59、60は脚部が長くのび、緩やかに開く器形である。60は口縁部が欠損しているが、故意に打ち欠かれているようである。61~63は脚部が大きくハの字に開く器形である。62、63は外面にハケメが施される。64、65は蓋である。編み笠状を呈する。64は縁に2つ孔が穿たれているが、この1対の孔は対面にもあると思われる。口径15.6cm、器高3.2cmを測る。65はミニチュアの蓋であろう。ほぼ完形であるが、これには孔は見られない。口径7.1cm、器高2.0cmを測る。

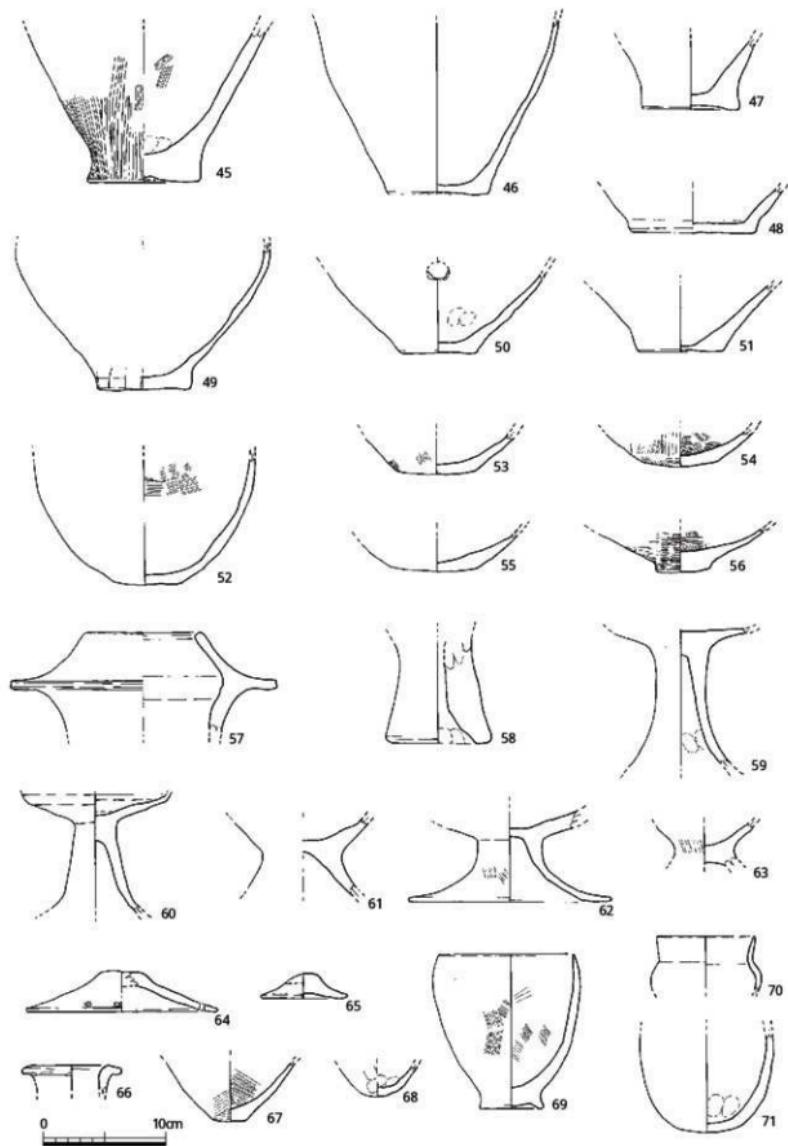
66~71はミニチュアもしくは小型の土器である。66はミニチュアの壺の口縁部である。口縁部断面は逆L字状に屈曲している。口径8.0cmを測る。67、68、71は甕の底部である。67は内外面にハケメが施され、底径2.6cmを測る。68は手づくねである。69はほぼ完形の小型甕である。胴部から口縁部にかけて緩やかに立ち上がる器形で、底部は平底に近い。口径11.0cm、器高12.8cm、底径5.2cmを測る。内外面にハケメが施される。70は小型丸底壺である。口縁部は直線的に立ち上がり、胴部は丸く張る。72は壺の口縁部である。大きく外反する器形で、口唇部には刻み目、内外面にハケメが施される。口径は14.2cmを測る。73、74は高坏の脚部である。いずれも大きくハの字形に開く。74は底径8.6cmを測る。75は製塙土器か。高台状を呈し、底径4.8cmを測る。69は飯蛸壺である。口径4.7cm、器高9.8cmを測る。胴部と底部に孔が穿たれている。

次に黒褐色粘質土層の下層である灰褐色粘質土層より出土した遺物について説明を行う。

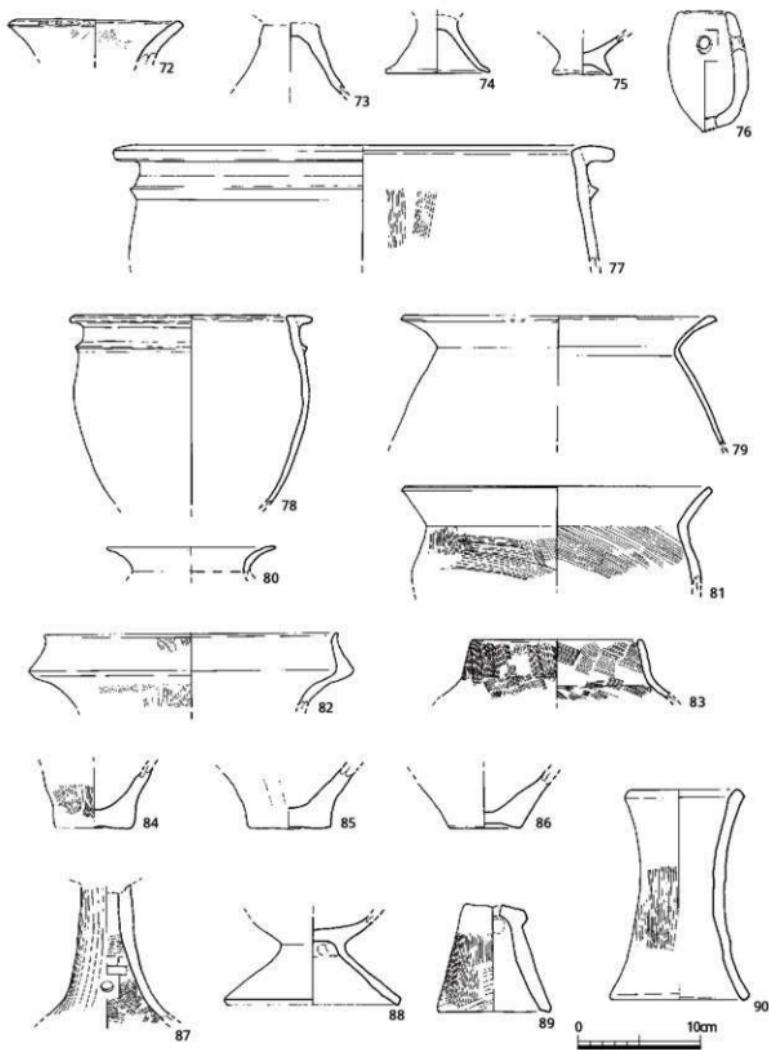
77~81は甕である。77の口縁部は逆L字状を呈し、口縁部下に断面三角形の突帯が1条めぐる。内面にハケメが施され、口径41.0cmを測る。弥生時代中期中葉頃であろう。78は口縁部断面は鋸先状を呈し、口縁部下に断面三角形の突帯を1条めぐらせる。胴部は緩く内湾する。口径19.8cmを測る。弥生時代中期中葉であろう。79は口縁部から胴部がく字状に屈曲し、胴部は大きく張る。摩耗が激しく調整は不明であるが、弥生時代終末頃か。口径は25.8cmである。81も同じような器形であるが、胴部の張りはやや弱い。内外面にハケメが施され、口径は25.4cmを測る。弥生時代後期後半頃であろう。80はやや小型の甕の口縁部である。口径は13.8cmで、口縁部はやや外湾する。古墳時代初頭に入るか。

82、83は壺である。82は複合口縁壺の口縁部で、口径は24.0cm、外面にハケメが施される。83は口縁部が内傾し、胴部は大きく張る器形である。内外面にハケメが施され、口径14.0cmを測る。古墳時代初頭頃か。

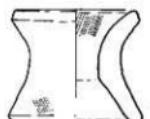
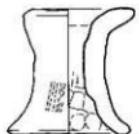
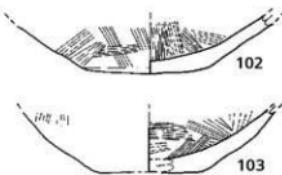
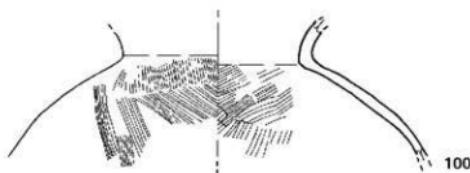
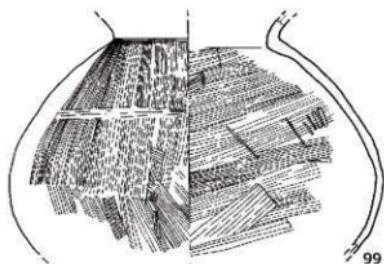
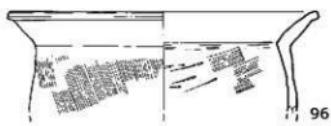
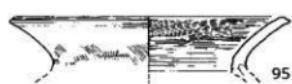
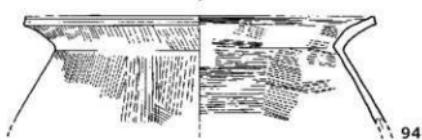
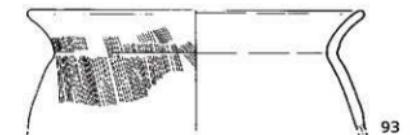
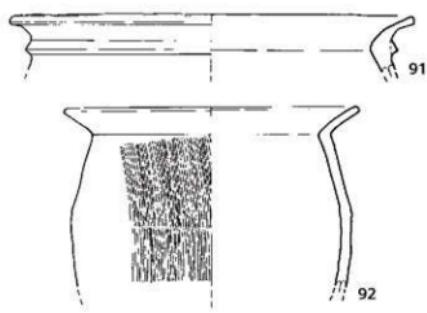
84~86は甕もしくは壺の底部である。84、85は厚めの平底で、各々底径6.4cm、6.6cmを測る。いずれも外面にハケメが施される。86は壺の底部か。やや上げ底を呈し、底径は5.9cmを測る。87、88は高坏脚部である。87は脚部が長く伸び、裾は緩く外反する器形で、裾部付近に2カ所孔が穿たれていている。外面はミガキのちナデで調整され、内面はハケメが施される。古墳時代初頭頃か。88は脚部がハの字形に開く器形である。底径14.4cmを測る。89は支脚である。外面はタテハケで調整され、



第16図 包含層出土遺物実測図3 (1/4)



第17図 包含層出土遺物実測図4 (1/4)



0 10cm

第18図 包含層出土遺物実測図5 (1/4)

底径9.4cmを測る。90は器台である。バチ形を呈する器形で、口径9.8cm、器高17.4cm、底径11.4cmを測る。弥生時代中期中葉か。

地山直上で検出された遺物は以下の通りである。

91~96は甕の口縁部である。91はく字状に屈曲した口縁部で、屈曲部に断面三角形の突帯が1条めぐる。弥生時代中期末~後期初頭の時期か。92、93、96は口縁部から胴部にかけてく字状に屈曲し、胴部は緩く内湾する。92は口径19.7cmを測り、外面にタテハケが施される。93は口径22.6cmを測り、外面にハケメが施される。96は口径20.8cmを測り、内外面にハケメが施される。いずれも弥生時代後期前半の時期であろう。94、95は前の3個体に比べて胴部の張りが強くなる器形である。94の口唇部端は平坦面を形成し、中央をややくぼませる。内外面にハケメが施され、口径23.4cmを測る。95は口縁部がやや外湾して立ち上がり、口縁端部に凹線がめぐる。内外面にハケメが施される。口径18.6cmを測る。弥生時代後期後半か。

97~100は壺である。97、98は複合口縁壺の口縁部である。逆く字状に屈曲し、外面にハケメが施される。98は口縁部に鋸歯状の線刻が施されている。口径は各々18.2cm、20.2cmを測る。弥生時代後期中葉頃である。99、100は胴部が大きく張る器形である。99は内外面ともにタタキの後にハケメが施される。100は内外面にハケメが施される。いずれも古墳時代初頭頃であろうか。

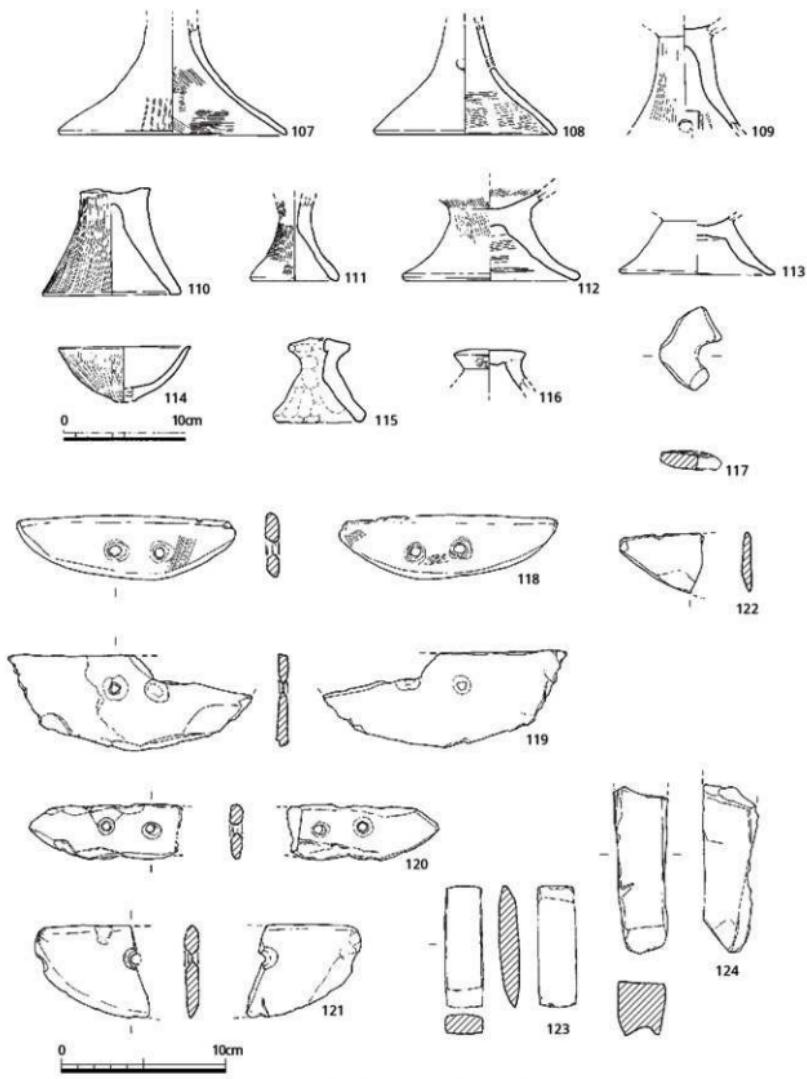
101~103は壺もしくは甕の底部である。101、103は平底を呈し、各々口径7.4cm、7.3cmを測る。いずれも内外面ともにハケメが施され、103は底部付近に黒斑が見られる。102はほぼ丸底を呈している。内外面ともにハケメが施される。いずれも弥生時代後期後半であろう。104は支脚である。上面に孔が穿たれている。脚部は八の字形に開く。上部の径7.6cm、器高11.6cm、底径11.8cmを測る。内外面にハケメが施される。105、106はやや小型の器台である。両者ともにハケメが施される。105は口径7.6cm、器高9.2cm、底径8.2cm、106は口径8.6cm、器高8.4cm、底径9.0cmを測る。

107~113は高坏の脚部である。107、108は裾部付近が大きく外反し、脚部上部は直線的に伸びる器形である。107は内面にハケメが施され、裾部外面には縦方向に暗文が残る。底径18.7cmを測る。108は脚部中央に孔が穿たれ、内面はハケメで調整される。底径15.0cmを測る。109も脚部中央に孔が穿たれ、外面にハケメが施される。いずれも古墳時代初頭か。110は内外面にハケメが施される。底径11.2cmを測る。111は小型の高坏である。外面にタテハケが施される。底径7.3cmを測る。112、113は脚部が大きくハの字形に開く器形である。112は全面にハケメで調整される。各々底径14.6cm、12.8cmを測る。

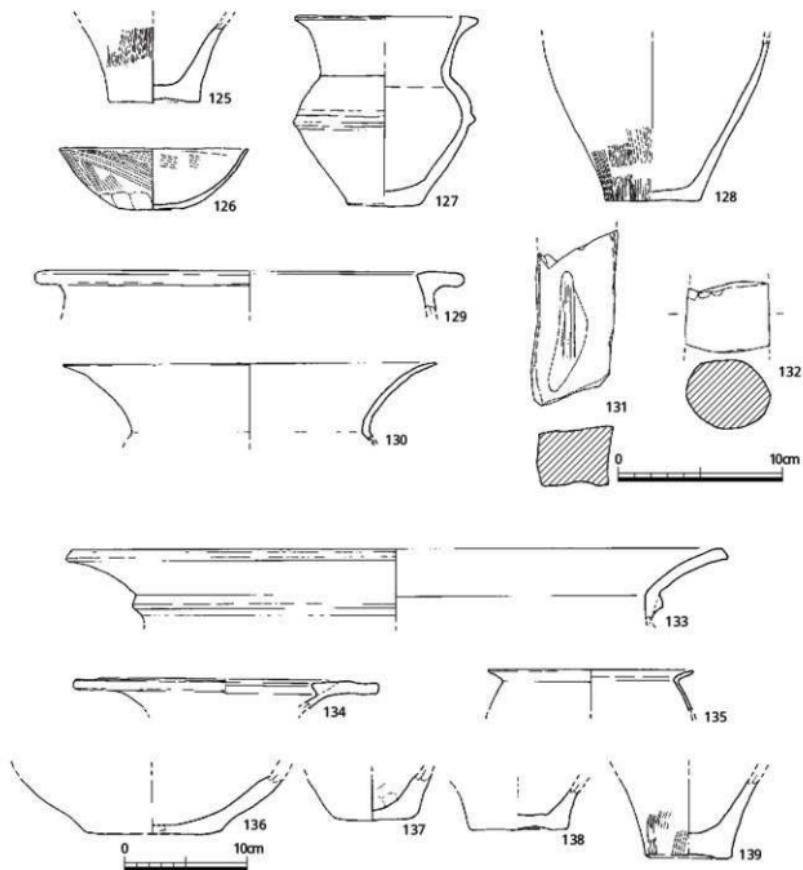
114は古式土師器の碗である。底部に厚みがあることから、高坏の坏部である可能性もある。外面にタテハケで調整がなされる。口径10.4cm、器高4.6cmを測る。115は支脚である。てづくねで整形される。上面に孔が穿たれている。上部径5.0cm、器高6.8cm、底径7.0cmを測る。116は蓋の上部である。

117は土製の紡錘車か。118~121は石包丁である。118は長さ13.3cm、孔の心間3.6cm、119は長さ14.8cm、孔の心間3.0cm、120は推定長さ15.0cm、孔の心間3.4cmを測る。123は扁平片刃石斧で、長さ7.4cm、幅2.3cm、厚さ1.2cmを測る。124は柱状片刃石斧である。現存長10.1cm、幅3.2cm、厚さ3.2cmを測る。

以上、包含層からは、弥生時代中期中葉~古墳時代初頭までの遺物が大量に出土した。一応層ごとに分けてみたが、いずれの層にも弥生時代中期~古墳時代初頭までの遺物が含まれ、特に規則性は見られなかった。丘陵上部からの流れ込みとも思われるが、ミニチュア土器や器台などの出土から、意図的に廃棄された可能性もある。



第19図 包含層出土遺物実測図6 (1/4, 1/3)



第20図 ピット・その他出土遺物実測図 (1/4, 1/3)

⑥その他の出土遺物

S P 9 0

125は甕の底部で平底を呈する。底径7.4cmを測り、外面にタテハケが施される。弥生時代中期である。

S P 9 5

126はポール状を呈する鉢である。口径15.6cm、器高5.0cm、底径5.0cmを測る。内外面にハケメが施される。弥生時代後期末か。

S P 1 7 6

127は壺である。ほぼ完形の状態で出土した。口径15.0cm、器高15.4cm、底径6.0cmを測る。胴部に断面三角形の突帯を1条めぐらす。弥生時代中期中葉である。

S P 1 3 8

128は甕の底部で、底径7.8cmを測る。外面にタテハケが施される。弥生時代中期である。

S P 3 1 9

129は逆L字状を呈する口縁部で口径35.0cmを測る。弥生時代中期中葉頃。130は甕の口縁部である。口縁は緩く外反して開く。口径30.4cmを測る。

S P 1 1 3

131は砂岩製の砥石である。現存長10.8cm、幅4.7cm、厚さ3.7cmを測る。1面のみ砥面として使用されている。

S P 2 6 5

132は磨製石斧の一部か。現存長4.3cm、幅5.1cm、厚さ4.1cmを測る。

遺構検出中出土遺物

133は大型甕の口縁部である。口縁部はく字状に開き、頸部に断面三角形の突帯が1条めぐる。口径54.4cmを測る。弥生時代後期後葉か。134は壺の口縁部である。口縁部断面は鋤先状を呈し、頸部から口縁部にかけて大きく外反する器形である。口径は25.0cmを測る。弥生時代中期末葉頃である。135は甕の口縁部である。口縁部はく字状に屈曲し、口径16.8cmを測る。弥生時代後期後葉頃であろう。136は壺の底部か。丸みを帯びた平底を呈する。底径11.2cmを測る。137～139は甕の底部である。137は底径6.5cm、138は8.0cm、139は7.1cmを測る。137は平底、138、139はやや上げ底に近い平底を呈する。139は外面にハケメが施される。

3.まとめ

席田大谷遺跡群第6次調査地点は、第5次調査地点までが位置している丘陵の西側麓に立地する。席田大谷遺跡群第1～5次調査地点及び赤穂ノ浦遺跡は丘陵上に乗り、本来この丘陵を囲った範囲が席田大谷遺跡群の範囲であった。今回、空港線道路拡幅工事に伴い、今回の地点に遺構が確認され、席田大谷遺跡群の範囲を拡張することになった。

第6次調査地点は、標高7.3～7.6mの花崗岩バイラン土上を遺構面とする。遺構面は南東から北西へ向かい緩く傾斜して落ちるが、調査区南端に位置するSC01が大きく削平を受けていることから、調査区南東側は現在の標高よりさらに高かったと考えられる。

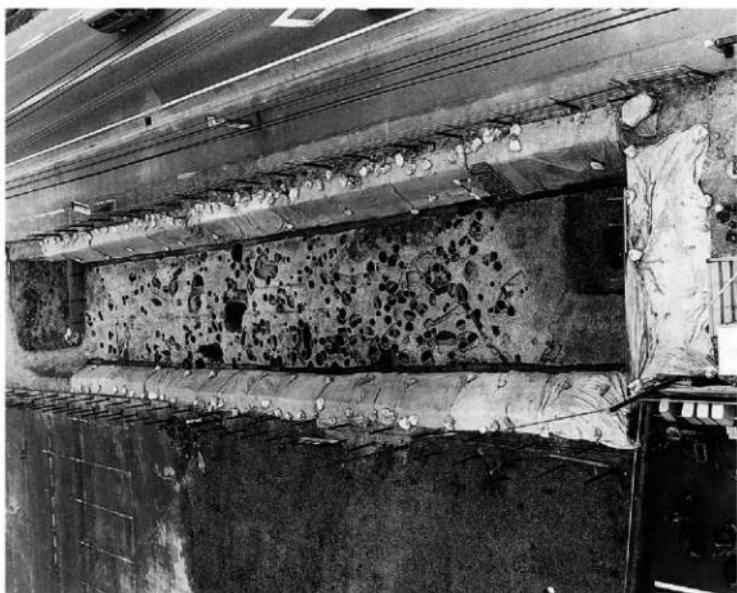
今回検出された遺構は、弥生時代中期と推定される円形住居址、掘立柱建物、弥生時代後期終末の井戸、弥生時代中期～古墳時代初頭の遺物を多量に含む包含層である。その他多くの柱穴、土坑を検出した。出土遺物から、主体とする時期は弥生時代中期中葉～後期末にかけてである。東側に延びる丘陵が落ちたいた地点とはいえ、遺構密度はかなり高い。第1～5次調査地点を見ると、弥生時代後期の集落（第1次）、弥生時代中期末～後期にかけての集落（第2・3次）、弥生時代後期の集落、中期の貯蔵穴、中期末～後期初頭の甕棺墓、後期の石蓋土壙墓（第4次）、弥生時代中期の甕棺墓（第5次）というように、弥生時代中期後半～後期にかけての集落が広がり、中期～後期の甕棺墓域も分布する。第6次調査地点も時期的にこれら丘陵上の調査地点と重なり、集落の広がりが丘陵麓まで延びることが伺える。

ここで隣接する久保園遺跡について見てみると、同一丘陵の北側に位置するが、弥生時代中期後半

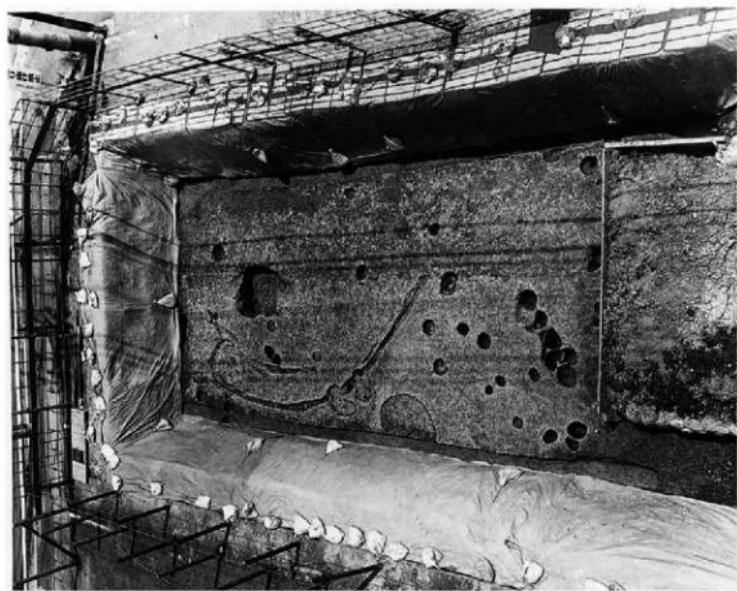
の大型掘立柱建物、弥生時代中期中葉～古墳時代に至る住居址（第1次）、弥生時代中期後半～古墳時代前期の溝、井戸等（第2次）、弥生時代中期後半～後期に至る住居址（第3次）など、弥生時代中期～古墳時代初めまでの集落が検出されている。とくに第3次調査地点は、本調査地点のすぐ北側に隣接しており、調査区南端は造構面が落ち込み包含層が堆積して遺物が大量に含まれていた。現在はこの落ち込みを境目とし、久保園遺跡群と席田大谷遺跡群を便宜的に分けている（第2図）。しかし、遺跡の内容を見てみると、両遺跡ともに弥生時代中期～古墳時代初めまでの集落が広がり、将来的には両遺跡を同一の遺跡として包括してもよいように思われる。

また、席田大谷遺跡群第2・3次調査地点での中国鏡の鏡片、第4次調査地点での石製銅戈鑄型模造品、赤穂ノ浦遺跡で銅鐸の鋳型、久保園遺跡群第1・2次調査地点での土器溜（祭祀造構）、第3次調査地点での銅鐸の鋳型等特殊な遺物、遺構の検出から、両遺跡あわせた集落の性格をさらに検討していく必要があろう。ちなみに久保園遺跡群第1次調査報告の中で、検出された掘立柱建物や住居址が祭祀的性格を持っていることの可能性が指摘されている（「久保園遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第91集）。また、席田大谷遺跡群第4次調査報告の中では、「銅製祭器作成に関わる特定集団としての様相」を呈していると指摘している（「席田遺跡群7」福岡市埋蔵文化財調査報告書第357集 1994）。今回の調査でも包含層の土器溜からミニチュア土器や筒形器台が出土しており、集落における祭祀形態が伺える。

以上から、席田大谷遺跡群が、弥生時代中期～古墳時代初めまでの時期を中心として丘陵麓を含めた一帯に広がり、隣接の久保園遺跡を包含した集落としての可能性を指摘することができよう。



1 調査区北側全景（北から）



2 調査区南側全景（北から）



1. 調査区北側全景と遠景（北から）



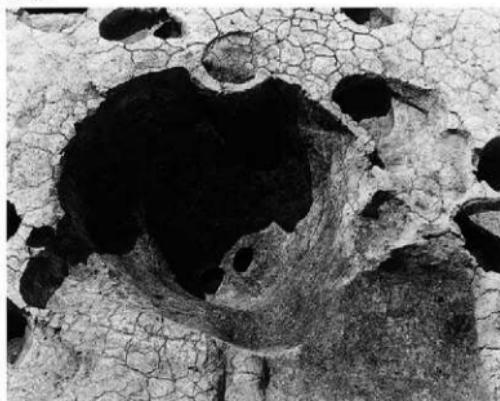
2. 調査区北側全景と遠景（南から）



3. SC01（南から）



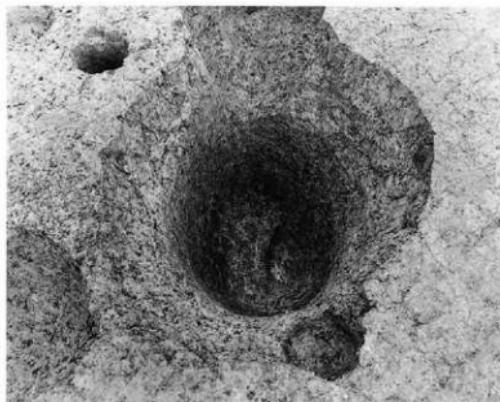
4. SP176遺物出土状況（西から）



1 . SE01完掘状況（北から）



2 . SE01遺物出土状況（西から）



3 . SK35（東から）



1 . SK16遺物出土状況（東から）



2 . SK60遺物出土状況（東から）



3 . SK47遺物出土状況（北から）



1. 調査区北側包含層土器溜（西から）



2. 調査区北側包含層土器溜（北東から）



3. 調査区北側包含層土器溜（南西から）



1. 包含層飯蛸壺出土状況（東から）



2. SK57遺物出土状況（南西から）



3. 調査区北側包含層完掘状況（南西から）



8



11

出土遗物 1



24



43



25



44



39



59

出土遺物 2



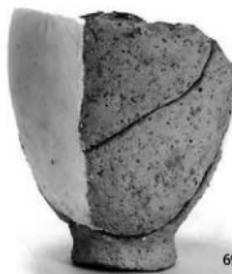
57



60



75



69



76

出土遗物 3



89



104



90



105



98



127

出土遗物 4



包含層出土遺物 1



包含層出土遺物 2

出土遺物 5

報告書抄録

書名	席田大谷遺跡群5
副書名	空港線関係埋蔵文化財発掘調査報告書3
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	828
編著書名	井上蘭子
編集機関	福岡市教育委員会
発行機関	福岡市教育委員会
発行年月日	20040331
郵便番号	810-8621
電話番号	092-711-4667
住所	福岡市中央区天神1-8-1
遺跡名ふりがな	むしろだおおたにいせきぐん
遺跡名	席田大谷遺跡群第6次
所在地ふりがな	ふくおかはかたくひがしひらお2ちょうめ4ばんちない
遺跡所在地	福岡市博多区東平尾2丁目4番地内
市町村コード	40132
遺跡番号	0024
北緯	33°34'48"
東経	130°27'33"
調査期間	20020508~20020713
調査面積	355m ²
調査原因	道路改良工事
種別	集落
主な時代	弥生時代~古墳時代
遺跡概要	弥生時代~古墳時代の集落、包含層
特記事項	
備考	

福岡市埋蔵文化財調査報告書第828集

席田大谷遺跡群5

- 空港線関係埋蔵文化財発掘調査報告書3 -

2004年(平成16年)3月31日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8-1

印刷 大野印刷株式会社

福岡市博多区櫻田2丁目2-65

